

成人看護学実習の展開

—臨床実習指導の時間区分による現状分析—

仙田 洋子・小玉 美智子

片山 信子・千田 好子

I はじめに

本学においては、臨床実習を各科別に展開していることはすでに報告した通りである。^{1) 2)}
 4) 学生が学校において基礎理論や科学的知識を得、それを実際の場で展開し理解して、はじめて臨床教育の目的は達せられる。臨床実習が臨床教育である以上それを担当するものに課せられるものは大である。そこで、筆者らは前回⁴⁾に引き続いて、残されていた「成人看護学をいかに展開していくか」の課題のうち、まず今回は教員が実習場でいかに指導すべきかを中心に検討を行なった。「現在、筆者らが個々に行なっている指導の内容から何らかの共通性を見出せ、またそこからおそらく実習指導の分担区分を考える手がかりが掴めるであろう」と考え、実習場で実際にどの位の時間を、どの分野の指導にあたっているかの行動を記録し、分析してみた。

II 調査の対象および方法

1. 調査対象

成人看護学担当教員4名（以下、I-1, II-1, I-2 II-2とする）*

2. 調査方法

昭和45年度入学生の「成人看護学実習」を行なうにあたり、担当教員が実習場における自分の行動を「2分間」の単位で記録した。

（表Iおよび表II）。

表I 昭和47年度臨床実習年間計画表

月 グループ		I 施設									
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	12月	1月	2月
		5週	5週	5週			5週	5週	2週		2週
I 病院 実習生 (3年次生)	A (8名)	母性 小児	成人2	成人1	夏 期 休 業	(6名)成人3 整形 (腎・ 皮膚)	母性	精神 総合	冬 期 休 業	/	総合
	B (8名)	成人1 小児	母性 成人2	(6名)成人3 (腎・ 皮膚)整形		小児					
	C (8名)	成人2	成人1 母性 小児	(6名)母 性 成人3 (腎・ 皮膚)整形		成人3 (腎・ 皮膚)整形					

		Ⅰ 施設												
月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		12月	1月	2月		
グループ		5週			5週			5週			2週		2週	
Ⅰ 病院実習生 (三年次生)	A (6名)	春 期	成人1	成人2	母性	夏 期 休 業	小児	(5名)成人3 (眼・耳・鼻)	整形	成人3 (眼・耳・鼻)	冬 期 休 業	／	総合	
	B (6名)		成人2	母性	小児		成人1	／	成人3 整形			総合	精神	
	C (6名)	休 業	母性	小児	成人1		成人2	(5名)総合	精神	成人3 整形		成人3 (眼・耳・鼻)	／	総合
	D (6名)		小児	成人1	成人2		母性	(4名)成人3 (眼・耳・鼻)	／	総合		成人3 整形	成人3 (眼・耳・鼻)	／

(註) 表中の成人1は成人内科，成人2は成人外科をあらわす。

実習日は，1週のうち火曜日の午前中を学内講義として除いた，月火水木金土曜日の5日をあてている。

※ I, IIは施設の別を表わし，1は内科，2は外科を表わす。以下この符号を用いる。

表Ⅱ 行動記録調査項目

<p>A 直接指導</p> <ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション・デモンストレーション (病棟機構，施設など，患者に関するもの，器械器具に関するもの，各種検査に関するもの，与薬に関するもの，診察介助，包交時の介助その他の看護技術。) 患者の理解に関する援助 <ol style="list-style-type: none"> 疾患に関すること(経過，予後，治療) 患者の背景(生活歴，家族，社会的，心理的，性格など) 看護方針，看護上の要点・注意 看護計画作成上の指導・援助 <ol style="list-style-type: none"> カンファレンス(集団) 個人指導 看護実践上の指導・援助 <ol style="list-style-type: none"> 準備 実践 記録・整理 	<ol style="list-style-type: none"> 実習展開への指導・授助 <ol style="list-style-type: none"> 個別(毎日の実習計画，患者について) 集団(面接，反省，小テスト) 補導・管理に関すること (面接相談，健康管理，みだしなみ，言動などに対する注意，こころくばり) 間接指導 情報収集 (患者訪問，カルテ，文献など，申し継ぎ，スタッフから，その他) 連絡交渉 (学生，患者，スタッフナース，医師，他のスタッフ，教員など) 実習に対する準備・点検 <ol style="list-style-type: none"> 資料作成，点検等 受持患者の選択等 実習計画，記録物の点検 臨床講義，見学など その他 教員の研修・研究など 病棟看護婦としての行動 待機・移動
--	---

実習配分表は表Ⅲに示す通りであるが，行動の記録は臨床実習のうち病棟実習の指導に向いた時間のみに限って行なった。調査期間は成人看護学実習が集中的に行なわれた昭和47年4月10日～同年9月30日までであるが，施設Ⅰにおいては実習計画の都合で，昭和47年7月15日までとした。

表Ⅲ 実習配分表(成人看護1・成人看護2)

区 分	要 項	週・日数
学内における 実 習	実習開始にあたってのオリエンテーション 実習場に出るにあたっての予習、復習	2.5日
病 棟 実 習	成人看護臨床実習要項による。	4 週
学内における 実 習	記録物の整理、症例発表など、実習のまとめ	2.5日

Ⅲ 臨床における実習方法

学生は各自実習要項をもち、内容の説明を受けている。この実習要項は成人看護学を一括して内科と外科共通のものである。実習要項のうち、「実習の展開」については表Ⅳに示す通りである。

表Ⅳ 実 習 の 展 開

実習初期の目標	実習中期の目標	実習後期の目標
受持患者について情報を収集し、看護の計画が立てられる。 (1) 患者のもつ疾病を理解する。 (治療方針を含む) (2) 情報の分析、統合をしてみる。 (3) 看護の必要度を理解する。 (4) 受持患者を理解する。 (註) 健康人の身体的、心理的、社会的な状態と比較して考える。	看護計画を実践、評価し、さらに心理的、社会的側面からも考慮しながら、看護計画を修正する。 (1) 自分のたてた看護計画を実践してみる。 (2) 実践後、この計画が適切であったかどうか自己評価する。そして看護婦や患者の評価をうける。 (3) 患者の退院後の生活を考え、保健指導ができるように計画し実践する。 (註) 指導しようと思う内容は、事前に案を作り必ず指導者又は臨床看護婦の点検をうけて実践する。	今までに実践した実習を整理する。 (1) 実習中期の目標、内容は引続いて実践する。 (2) それと同時に受持患者に、何をやってきたのか、自分の行なった看護が患者に対してどういう意味をもっていたのであろうか……など、家庭とのつながり、社会との関連において、臨床看護の役割を考える。

また、各実習場の実状の相違点をあげると表Ⅴの通りである。

表Ⅴ 施設別・科別相違点

Ⅰ 施 設	1 科	8名グループの学生が4名ずつ分かれて、2看護単位で実習した。 その間成人内科看護実習生は本学の学生のみであった。
	2 科	8名グループの学生が1看護単位で実習した。 その間看護実習生は本学の学生のみであった。
Ⅱ 施 設	1 科	6名グループの学生が4名と2名に分かれて2看護単位で実習した。 その間成人内科看護実習生は、ほぼ本学の学生のみであった。
	2 科	6名グループの学生が1看護単位で実習した。その間他の二校の看護学生が常時4～10名ずつ実習を共にした。なお、この実習場には病院看護部所属の専任臨床指導者が他校の学生が実習する期間は常駐していた。

Ⅳ 調査結果

1. 指導時間に対する指導項目の割合

表Ⅵ-1 (指導時間に対する指導項目の割合) ……略

・〔Ⅰ-1〕について

直接指導と間接指導の割合は、ほぼ同率を示した。項目別にみると「情報収集」が目立って多く(22.8%),次に「看護計画作成上の指導・援助」(13.6%),「実習に対する準備・点検」(11.4%)が多い。

表Ⅵ-2 (指導時間に対する指導項目の割合) ……略

・〔Ⅱ-1〕について

直接指導と間接指導の割合は直接指導がやや多い。項目別にみると「待機・移動」が1位を占め(19.2%),「実習に対する準備・点検」(12.6%),「看護計画作成上の指導・援助」がほぼ同率(12.4%)で、次に「情報収集」「実習展開への指導・援助」が続いている。「補導・管理」に関する項は他の教員にくらべて高率を示しているが目立つ。

表Ⅵ-3 (指導時間に対する指導項目の割合) ……略

・〔Ⅰ-2〕について

直接指導と間接指導の割合は他の教員にくらべて直接指導が高率(53.4%)を示している。項目別にみると「看護実践上の指導・援助」が1位(31.5%)を占め、その中でも実践そのものの指導が高率(26.3%)なのが特徴的であり、「情報収集」が大差なく(30.3%)続いている。反面、「実習に対する準備・点検」の項目が非常に低率(2.9%)である。

表Ⅵ-4 (指導時間に対する指導項目の割合) ……略

・〔Ⅱ-2〕について

直接指導と間接指導の割合は、ほぼ同率を示した。項目別にみると「待機・移動」が1位(20.2%)を占め、次いで「実習に対する準備・点検」が多く(17.0%),「看護実践上の指導・援助」(16.5%),「実習展開への指導・援助」(10.5%)がこれに続いている。

2. 各教員の指導時間数の平均総時間数に対する項目別割合

1) 共通性があると思われるもの

イ) 実習に対する準備・点検

Ⅰ 施設		Ⅱ 施設	
1 科	2 科	1 科	2 科
27.3%	9.5%	24.0%	39.2%

Ⅰ-2で低率を示したのを除けば、平均した値を示している。

ロ) 実習展開への指導・援助

Ⅰ 施設		Ⅱ 施設	
1 科	2 科	1 科	2 科
24.2%	22.2%	24.2%	29.4%

各教員が最も平均した割合で指導している項目である。

ハ) 看護計画作成上の指導・援助

Ⅰ 施設		Ⅱ 施設	
1 科	2 科	1 科	2 科
33.7%	29.9%	24.5%	11.9%

Ⅱ-2を除けばほぼ平均して教員が指導している項目といえる。

2) 内科・外科の科による差と思われるもの

イ) 看護実践上の指導・援助

1 科		2 科	
Ⅰ 施設	Ⅱ 施設	Ⅰ 施設	Ⅱ 施設
15.8%	6.5%	56.7%	21.2%
22.3%		77.9%	

3) 教員の個別差と思われるもの

イ) 情報収集

Ⅰ 施設		Ⅱ 施設	
1 科	2 科	1 科	2 科
27.8%	49.4%	10.3%	12.4%

ロ) 待機・移動

Ⅰ 施設		Ⅱ 施設	
1 科	2 科	1 科	2 科
12.6%	21.0%	29.3%	37.2%

V 考 察

1. 共通性があると思われるもの

1) 実習に対する準備・点検

臨床実習を教育的かつ効果的に展開するためには、実習場の実状をふまえて、学生個々の潜在的な能力をひき出し育成するため、綿密な準備が必要である。また、学生が実習を終えた後に、その結果を確認することにより学習効果を判定する必要からも、この項目は教員が責任をもって行なうべきものとする。なお、Ⅰ-2では主に実習時間外に持ち出して行なったため低率を示した。

2) 実習展開への指導・援助

われわれは実習要項に沿って看護実習が展開できるよう学生を指導し、援助していかなければならない。また、これは 1) とも切り離せられない項目であり、実習目標への到達状況をその都度確認し、その過程で遅れたり、行きづまった学生への指導・援助は特に重要と考える。

3) 看護計画作成上の指導・援助

われわれは指導上、看護過程の内容を重視するならば、学生が自分の受持った患者に

対して看護の必要性を理解し、適切な計画をたて、実践に至る思考過程を確認し、必要時に指導・援助をしなければならないものとする。

2. 科別差と思われるもの

外科系の教員が「看護実践上の指導・援助」に多くの時間を費している。これは実習要項の中で、その目標の1部に『外科的治療（無菌的操作、術前・術後の看護処置）に伴う看護を習得するとともに緊急時における適切な処置介助ができる能力を養う』とあげていることからもうなずける。また、学生が「外科的看護に伴う特殊技術」を初めて実習する場合には、教員はことにその実践の準備とあと始末の指導に重点をおく必要がある。

3. 教員の個別差と思われるもの

1) 情報収集

われわれが適切な指導を行なおうとするならば、学生の受持っている患者についての情報を把握しておく必要があり、その情報を得る手段としては種々の方法が考えられる。このことは実習場の看護婦諸姉に大いに協力を得たいところであり、われわれとしてもよりの確かな情報が得られるよう研鑽をつんでいかなければならないであろう。

2) 待機・移動

前回の報告⁴⁾で述べたが、教員は「教員がいる場所を常に明らかにして、いつでも学生が相談できる体制にしておく」ことが望まれるが、実習場の実情と教員のもつ個性などがあって、個人差がでた。しかし、今後われわれはいつでも学生の相談に応じられる体制をとっていきたいと思う。ウィーデンバック⁸⁾によれば「学生が臨床の場で行なうことが望ましい成果を得る方向に向うのを確実にするためには、教師がいつでもそこにいて、すぐに学生の求めに応じられる必要がある」と述べているが、われわれもこれを肯定するものである。

実習場のもつ環境要因はもちろん、各教員のもつ個性を考え合せたときに、画一的な実習指導は望むべきではなく、また実現不可能なことを考えられる。そこで個々の教員の行なうべき指導の役割を達成するために、実習開始にあたって教員間の話し合いはもちろん、実習場の関係職員とも十分に連携をもち、詳細な打合わせが必要であろう。

この調査にあたり、項目の設定および分類におお検討の余地を残したことで、筆者らの綿密な連絡を欠いたこともあって当初の目的からは満足のいく結果を得るに至らなかった。

Ⅵ ま と め

過去数年の実習指導を経験し試行錯誤を重ねながらも、看護教育における臨床実習指導の方向をまとめようとした。今回は、成人看護学担当の4名がそれぞれに実習場における自分の行動を分析してみた。

この調査では単に時間的な分析にとどまったが、①「実習に対する準備・点検」、②「実習展開への指導・援助」、③「看護計画作成上の指導・援助」などの項目においてはほぼ共通する傾向を見出すことができた。これらは教員として、その実習を展開させる上に欠くことのできない項目であるとする。そして、これをより充実して行なうためには教員の努力はもとより、現場にいる医療職員、とくに看護婦諸姉の協力を得なければ不可能といえよう。しかし、更に大切なことはその費す時間の内容にかかるものと考えられる。薄井氏⁹⁾のいうように、「個々の対象への実践のポイントを自分で主体的にひき出してこれよう」に指導・援助する

ことが教師の役割であり、それにはまず、看護過程の内容を重視し、「いつ」、「何を」、「どこで」、「どのような方法」で、指導すべきかを究明しなければならない。また、これと合せてわれわれが真に専門職としての看護婦の教育を志向するならば、天野氏⁷⁾の指摘するように「理論的知識にもとづいた技術を必要とし、その獲得のために専門化された長期間にわたる教育訓練が必要となる」ということであり、われわれ教員は更に専門化された知識と技術を習得することの必要性を痛感するものである。

稿を終えるにあたり、終始ご指導、ご校閲下さいました本学教授三木福治郎博士ならびに、合田富美子助教授に深く識意を表します。

参 考 文 献

- 1) 藤原幸江：新カリキュラム，小児看護学の運用に関する報告，全国看護協会誌通巻 2
- 2) 藤原幸江：岡山県立短期大学看護科における臨床指導の考察（第一報），第10巻，第6号，看護教育，医学書院，1969
- 3) 丸橋佐和子：臨床実習を終えて，看護教育，No 5，VOL 12，1971
- 4) 仙田洋子他：臨床における実習指導を考察して，岡山県立短期大学研究紀要第16号，1972
- 5) 薄井担子：看護教育への提言，看護23巻4号～同23巻12号，1971
- 6) 高橋章子他：臨床実習指導について，愛知県立看護短期大学雑誌，第3号，1972
- 7) 天野正子：専門職化をめぐる看護婦，看護学生の意識構造，看護研究，No 1，VOL 5，1972
- 8) E・ウィーデンバック著，都留伸子他訳：臨床実習指導の本質，現代社，1972
- 9) KATHLEEN. K. GUINEE 著，稲田八重子訳，看護教育の目的と方法，医学書院，1970

紙面の都合によって、表Ⅴ-1～表Ⅴ-4を割愛したことをお詫びいたします。と共に御入用の方はお申出下さい。